

プロローグ

クリニック承継のタイミングとは？

週のはじまり、明日野クリニックの院長、明日野一郎は普段よりも早く起きる。そしてスタッフよりも先にクリニックに着き、玄関前のスロープと駐車場を庭ぼうきで掃く。それが、二十数年前、この地にクリニックを開いたときから続けている月曜日の朝の習慣だ。もともと開業した当初は、毎朝の習慣だったのだが。

今では、開業当初から勤めてくれている看護師長の山崎晶子をはじめ、スタッフたちが、クリニックの受付開始時間より早く来て、朝の掃除は担当してくれている。ただ、それでも月曜日だけは自分で朝の掃除をするようにしているのは、開業した当初の思いを忘れたくないからだ。

両親は小さな文具店を営んでいた。決して裕福とはいえない家庭環境だったから、できる限りお金に苦労することのない、そしてやりがいのある職業をめざし、国立大学の医学部になんとか現役で滑り込んだ。奨学金とアルバイトで6年間の学費を捻出して医者になり、そのまま大学の医局に籍を置き、10年間余の勤務医生活を経て開業した。

高校時代、自分の志望を医学部に決めるときから、将来は地元に戻って開業しようと決めていた。生まれ育った相原市は、住所こそ東京都だが、「東京」と聞いて人々が連想するようなイメージとは

程遠い田園風景が広がっていた。

開業してすぐの頃から、日本経済の成長とともに、新しい家が建ち始め、団地ができていったが、一郎が幼かった頃は、まわりは田んぼや畑だらけで、はじめて町にコンビニができたときには、ようやく東京らしくなると喜んだものだ。

クリニックだって、はるか遠くに行かなければなかった。一郎が病気になる、両親は苦勞しながら遠くのクリニックに連れて行ってくれた。

この町にクリニックがあれば、両親はお店を休まなくてすむのに。

町の人たちだって、もっと助かるのに。

そう、子ども心にぼんやりと思っていた。だから、将来のことを具体的に考えなければいけない年齢になったとき、一郎の頭に真っ先に浮かんだのは、この町の人たちのために医者になるということだった。

その後、一郎が医学部を卒業する頃には、町の発展とともにクリニックもいくつかできていたので、自分がこの町に開業する必然性はなくなっていたのだが、それでも、「この町の人たちのために自分は医者になったのだから」と、初志貫徹、この地に戻ってきてクリニックを開いたのが二十数年前のことだ。

うららかな春の日差しの中、庭ぼうきを片手に、クリニックの前を通り過ぎる人々——その多く

は一郎の患者だ——に「おはよう」と声をかけながら、一郎は週末の出来事を思い返していた。

この4月、一郎は還暦を迎えた。

そして週末、妻の加代と、長男の直樹夫婦、長女の和美一家が集まり、一郎の還暦を祝って食事会を開いてくれた。

還暦だからと言って、特別な感慨があるわけではない。老いを感じているわけでもない。むしろ、赤いちゃんちゃんこなんて着たくもないと思っていたが、いざ、「じいじ、おめでと〜う」と、もうすぐ3歳になる孫の侑太に手渡されると、自然に口元がほころんだ。

その食事会でのことだ。

「お父さんは、仕事、まだまだ続けるんでしょう？」

目を離すとバタバタと店内を歩き回り、隣の個室に顔を覗かせてしまう侑太に目を光らせながら、和美が聞いた。和美にしてみれば、何気ない一言だったのだろう。

でも、一郎は一瞬、言葉を詰まらせてしまった。そうか、還暦ということはもう「やめどき」を意識しなければいけない時期なのか、と。

そして、今まで気にはなっていたけれど見ないようにしてきたあることが、まるで春を待ち望んでいた芽吹きのように姿を現した。

還暦になった私と同じように、スタッフもまた齢を重ねている。なかには退職をするものもいるし、残るものも昔ほど澁刺とはしていない。

私はこの地でいつまで医療を続けられるのだろうか。大学の先輩、医師会の先輩方のなかには70歳を超えても現役を続けている先生も多数おられる。

しかし一方では、つい最近まで元気に診療を続けていたのに、くも膜下出血や心筋梗塞を発症して、急逝してしまった先輩もいる。確か、息子さんたちは急に後を継ぐことになって大変な日々を過ごしている、噂で聞いた。いや、それはまだいいほうなのかもしれない。なかには、後継ぎがいなくて、閉院を余儀なくされたクリニックもある。

果たして自分はどうであろうか。

今のところは健康に不安はないが、いつ何が起こるかなんてわからない。

そんな不安をかき消すように、

「もちろん。まだまだ私を頼りにしてくれる患者さんたちがたくさんいるからね。何しろ、私が辞めたらクリニックはどうなる？ 続かなくなるだろう」

そう一郎が返すと、夫と娘の会話に耳を傾けていた加代がぼそつと漏らした。

「でも、そろそろお父さんの後の代のこととも考えなきゃねえ」

その後も食事は和気あいあいと続いたが、一度姿を現した芽は引っこむ気配もなく、一郎の心の片隅を占領していた。